

支援について考えよう		吉田 里々香 横浜市立川和東小学校
担当教科：全教科 対象学年：小学5年生	実践教科：総合的な学習の時間 対象人数：20名	時間数：13時間

指導案

実践の目的

- ・研修で見てきたカンボジアの現状を具体的に伝えることで、他国についての興味をもち世界について知る。(異なる文化をもつ人々を理解し、尊重する態度)
- ・先進国・発展途上国があることを知り、自分たちができる支援について考えようとする態度を育成する。(地球規模での課題の理解と自分(なり)の生活や行動)

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	「カンボジア」ってどんな国？ ねらい：カンボジアを知ることによって世界に興味をもつ。	(1)写真や地図を見ながらカンボジアの紹介をする。 (2)クイズ形式を取り入れ、日本との違いを楽しむ。	(1)パワーポイントにてカンボジアの紹介をする。(カンボジアで撮影した写真、地雷の標識など)
2 3	世界にはどんな国があるのだろう～国旗からわかる国の特徴～ ねらい：国旗を調べるだけでなく、国旗にはその国独自の思想や文化などが含まれていることを知る。	(1)世界の色々な国旗を調べる。 (2)国旗にはその国の特徴や文化が現れていることを知る。 (3)自分の興味を持った国の国旗からわかることを調べる。	(1)世界地図 (2)国旗 (3)世界の国々の文化・食べ物・風土・宗教などの本
4	世界がもし100人の村だったら ねらい：先進国・発展途上国の存在をしる。	(1)世界クイズ大会をひらき、世界の貧富の格差について問題意識をもつ。	(1)書籍「もし世界が百人の村だったら」 (2)パワーポイント
5	世界がもし100人の村だったら ねらい：文字が読めないことによる不安な気持ちを体感する。カンボジアでは文字の読めない人がまだたくさんいることを知る。	(1)読めない文字で書かれたラベルの飲み物を飲むことで、文字を知らない怖さを体感する。	(1)カンボジアの文字で書かれたラベル・ピン3本 (2)現地で撮影した写真・カンボジアの家族の話
6	支援について考えよう ねらい：発展途上国とのつ	(1)「100人村」のメッセージを読み、気になった箇所に線をひく。	(1)書籍「世界がもし100人の村だったら」

	ながりを理解し、自分たちにできる支援を考えてみる。各グループで支援の方法を発表する。カンボジアの支援の実態をしる。	(2)同じ箇所に線を引いた人同士が集まり、解決に向けて何ができるか話し合う。 (3)自分たちのグループの発表をする。	
7	支援について考えよう ねらい：発展途上国とのつながりを理解し、自分たちにできる支援を考えてみる。各グループで支援の方法を発表する。カンボジアの支援の実態をしる。	(1)世界にはユニセフなどの支援が必要な国があることを知る。 (2)カンボジアの小学校に、どんな支援をしたいのか考える。	(1)ユニセフ活動のビデオ (2)現地で撮影したカンボジアの小学校の写真 (3)ダイヤモンドランキングの表
8	支援について考えよう ねらい：発展途上国とのつながりを理解し、自分たちにできる支援を考えてみる。各グループで支援の方法を発表する。カンボジアの支援の実態をしる。	(1)カンボジアでボランティアをしている横浜市教員小松さんの紹介をする。 (2)授業・支援の様子の紹介 (3)支援とは、その場限りで終わるものでなく、続いていくものも大切だということを知る。	(1)現地で撮影した写真 (2)パワーポイント
9～12	調べたこと・考えたことをくすのき祭で発表しよう	(1)国語「人ともとの付き合い方」にしたがって、発表原稿や写真などを作成する。 (2)発表の練習をする	(1)光村5年国語上「人ともとのつきあい方」
13	くすのき祭の振り返りと今後の課題	(1)発表の振り返りをする。	

授業の詳細

1時限目：カンボジアってどんな国

夏休み前に、学年の子供たちにはカンボジアに勉強をしに行くことを伝えていた。カンボジアの子どもたちに会ったらどんなことを聞きたいかなど、事前にアンケートをとっていたので、そのこと考慮しつつカンボジアの国の位置や食べ物、働く子どもたち、戦争、支援活動などを簡単に紹介する。（「カンボジア体験記」）



使用した資料（一部抜粋）

アンコールワットの写真や現地で体験した面白い話には子どもたちも興味を持ってきいていた。

とくにコオロギのからあげやはずの実が食べられること、不発弾の処理の様子などにはとても驚いていたようだ。

そして、学校の文化祭である「くすのき祭」に向けて学年で各プロジェクトに分かれて活動することを発表する。「バスケット・演劇・歌・情報・米作り・国際理解」に分かれることを知る。アンケートの結果、「バスケット50名、演劇50名、歌20名、情報20名、米作り50名、国際理解20名」に分かれることとなった。

国際理解を選んだ子どものアンケートの内容には、「カンボジアの話聞いて世界の色々な国に興味をもった。」「世界の食べ物について知りたい。」「通貨は何を使っているのか。」「国旗の種類を知りたい。」「世界遺産について調べたい。」「英語を学びたい。」「世界のびっくり話を調べたい。」など思いは様々であった。

2・3時限目：世界にはどんな国があるのだろう～国旗からわかる国の特徴～

ここからは各プロジェクトに分かれての活動となる。子どもたちに事前にどんなことを調べていきたいのか聞いたところ、「国旗が知りたい」という意見が多かったので、国旗から世界の国々について広がるよう授業をする。「国旗の色にはどんなのが多い。」と聞くと、「赤や白、青もあるよ」「緑が多いなあ」「黄色もあるね。」など国旗を見ながら自由に発言していた。そこから緑について焦点をあて授業をする。実は唯一、緑一色の国旗「リビア」を例にだし、国旗には国の深い意味があることや宗教、色の象徴などについて学ぶ。そこから自分の好きな国旗あるいは興味のある国の国旗を選び、その国について色々を調べるようにする。

調べるときの視点として、日本を例に出し、国旗の意味・食べ物・有名なスポーツ・日本の学校との違い・お金・服装・文化・世界遺産・その他である。これを例に図書室に行き、世界の国々に関する本を借りたり、インターネットで調べたりする。

「以前に住んでいたイギリスについて調べよう。」「この国旗におもしろい絵がかいてあるな。調べてみたいな。」「社会の教科書に、砂に埋もれた国がのっているよ。調べてみよう。」など、子どもたちはしっかりと国を選び調べていた。ガイドブックを見たりして、ワークシートにまとめていている子どももいた。なかなか時間内ではできないので、各自で調べていくように確認する。

4時限目：世界がもし100人の村だったら

1)各自調べてきた国の国旗を黒板にはる。どこの圏が多いか。なぜ人気があるのかなど思ったことや考えたことを全体で数人に自由に発言させる。「アメリカやイギリスはよくニュースで見るとわかるよ。」「キリバスってどこ？チュニジアもあまりきかないなあ...。」という意見がでる。ここから日本と親交の深い国や世界で注目をあびている国があることに気づく。世界には経済的にも大きい国があり、それらは先進国と呼ばれていること。また、国として発達している途中の国を、発展途上国ということを知る。

2)その後、子どもたちがどれだけ世界の状況について知っているのか「世界クイズ大会」をする。5人グループに分かれる(カードを用意しておき、同じマークのグループの人を探す。)

Q1.「世界の人口は、現在何億人くらいでしょう。」(全て3択問題)

Q2.「1950年の世界人口はどれくらいでしょう」

Q3.「2050年の世界人口はどれくらいでしょう。」

Q4.「世界の人口のうち、男性と女性どちらの人数が多いと思いますか。」

Q5.「世界の国でインドと中国では女性の人口が男性よりも1億人少ないと言われていますが、なぜだと思いますか。」(口頭問題)

Q6 . 世界は今、高齢化？若年化？

Q7 . 次の言葉を世界で最も多くの方が話している順番に並べてください。

スペイン語 英語 ヒンディー語 中国語

Q8 「世界で文字が読めない人はどのくらいでしょう。」

3) 「100人の村」のコピーを配る。これから「100人村」のメッセージを全文読むことを伝え、その間に自分が一番印象に残った箇所を選んでおくように指示する。「もし世界が100人の村だったら」を読む。

世界クイズ大会では終始盛り上がり活動していた。今の世界の状況に驚いたようだ。特に、言語のところでは英語が最も多く話されていると思っていた子どもが多く驚いていた。最後の「世界で文字が読めない人はどのくらいでしょう。」の回答では、「えー、そんなに文字が読めない人がいるの？」という反応だった。その後、「世界がもし100人の村だったら」を読むと、子どもたちは静かに聞いていた。時間も残り少なかったため、最後に「テレビや新聞で報道されている世界の国々は、ほんの一部だね。これからもっと広い視野をもって世界をみていこう。」と発言した。日本のように恵まれた環境にいと、なかなか言葉だけでは世界の現状を想像しづらいと感じた。

5時限目：世界がもし100人の村だったら

前時をうけ、文字が読めない人がたくさんいたことに驚いていたので、体験できる授業を展開する。

1) 文字が読めない人たちを一つの家族に見立て、役割をふる。(父親・母親・子ども3人)
5×4グループ

2) カンボジアの話をしながら、状況設定をする。

家族で畑作業をしながら暮らしている。この一家は今まで学校には通ったことがなく、話すことはできるが、文字を読むことができない。ある日、父親が病気にかかってしまい、食べ物食べられない状態が続いた。しばらく様子を見ていたが、子どもも病気になってしまう。困った母親は、隣の家に相談すると、「それは今流行りの病気だ。隣の町の薬屋さんに治す薬があるからそれを飲むといい。」と言ってくれた。隣の町までは、15キロ離れている。母親は朝からずっと歩いていった。お金は4000リエル【日本円で約80円】もっていった。隣の町に着いた時には、もう夜中だった。店には、人がいなく薬だけが並んでいた。3本の薬があるが、買えるのは一つだけである。さあ、どの薬を選ぶ。またそれを選んだ理由は、

3) 各グループで薬をつぎ分けて飲んでみる。文字が読めないと、どんな不便さがあるのか、家族で考えて発表する。

できるだけ、「文字が読めないこと」に対する大変さを感じ取ってほしかったため、カンボジアのある一家の話を作った。できるだけ現実に近いよう設定した。「15キロ離れている～」のところでは、「えー、15キロって遠いよ。」などの声があがった。薬の値段にも驚いていた。少しでも日本とカンボジアとのちがいを知れればと思う。薬を飲むところでは、みんな「大丈夫かな。」という顔をしており、後で感想を聞くと、「なにか分からないから飲むのにドキドキした。」「文字が読めないと新聞とかもわからないし大変そう。」「買い物とかで色々不便そう。」などの声があがった。

6時限目：支援について考えよう

1) 「世界がもし100人の村だったら」を一人一段落ごとに回し読みをする。読み終わったら、どの箇所を選んだのか聞き、どうしてその箇所を選んだのか話す。

2) 同じ箇所を選んだ人同士が集まり、どうしてそうなったのか解決に向けてわたしたちはどんなことができるのかなどについて自由に話し合う。その後、グループごとにどの問題を選んだのか、どんな話し合いをしたのか発表する。

子どもたちの発表から

【50人は栄養失調：私たちにできること】

- ・ユニセフ募金をおくる。
- ・食べ物をおくる。(大豆など栄養があるもの。)
- ・薬をおくる。
- ・食べ物を無駄にしない。

【居住環境：私たちにできること】

- ・募金して家をたてる。(宿泊施設をたてる。)
- ・石で家を積み立てる。

【文字が読めない人：私たちにできること】

- ・募金して学校をたてる。
- ・大学の教育を受けた人が教える。

【両親が一緒ではない：私たちにできること】

- ・その子どもに対して私たちがやさしく接する。仲間はずれなどにしない。
- ・なるべくそのことに対して言わない。「死んじゃったの？別れたの？」とか。
- ・その子がいままで以上に楽しくできるようにしてあげる。

時間がないため、より詳しく聞くことはできなかったが、子どもたちなりに一生懸命に考えてくれた。実際に似たような経験がないため、具体的なイメージをもつのは難しい。ニュースや宣伝広告などで知っていることを話している子どももいた。最後の「両親が一緒ではない」では、自分ごとのように考えて解決策を考えていた。もしかしたら今の日本で一番身近な問題なのかなと感じた。

7時限目：支援について考えよう

前時をうけ、「募金をする。」という意見が多かったため、募金についてくわしく考える授業をする。

1) 学校の国際理解委員会の活動でユニセフ募金がある。どうして募金をするのか、募金はどのように使われているのかを知るためにユニセフの活動の映像を見る(14分間)(映像ステーション 一般コンテンツ 「ユニセフと地球の友だち」から)

飢餓で苦しんでいる子ども、何キロメートルも離れているところまで毎日水をくみにいっている子どもの映像などを見て、「本当に苦しんでいるんだ。」とつぶやいた子がいた。話を聞いているだけでは半信半疑だったようだ。

2) プレイングゲーム

カンボジアの学校の風景を見せる。

この写真はカンボジアにある学校です。あなたたちは、カワウユニセフ学校の代表です。カンボジアの子どもたちへ何か支援をしたいと思います。あなたは、なにを支援しますか。教室の風景の写真を配る。

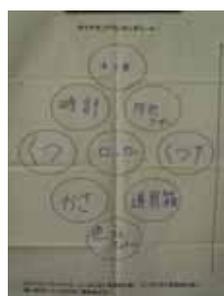


使用した資料(一部抜粋)

3) ダイヤモンドランキングを用意し、まずは、一人ずつ考える。その後、5人1グループでどんな支援をするのか考え発表する。

教室の様子をよく見て考えている子が多かった。「時計がないなあ、扇風機もないから暑そうだな。先生、カンボジアって暑いのか?」や「給食はあるのかな。」など色々と質問が飛び交った。

子どもたちのダイヤモンドランキング



子どもたちのランキングには、学習用具や電気器具、食料などの物資が多かった。発表が終わった後に、「もし、食料がなくなったり、ものが壊れたりしたらどうするの。」と質問すると、「うーん、また送るようにする?」「でも何でもおくれるものじゃないし。」と少し困惑気味だった。「実はこの教室には電気の配線が盗まれて電気が通っていないんだよ。」という、「えーっ!じゃあクーラーやTVをあげても使えないじゃん。」と驚いたようだ。続きを次時にやることを確認して終了する。

8時限目: 支援について考えよう

支援とはただ与えるものだけでなく、一緒に協力して物事を成し遂げることや、知識を伝えることもあるのだということを紹介する。

1) 前回の写真から振り返りをする。PCや電子オルガンの山積みされた姿や使われていない机。(故障しても直せる人がいない。)落書きされた机。(日本の小学校から送られてきた

もの。)なぜこのようになってしまったのか、故障しても直せる人がいない、操作できる人がいない、壊れたらそのままという現状に目を向けさせた。

2) JOCV小松さんの活動の紹介(理科教育支援員)

カンボジアで理科を教えている。現場であるものを使ってそれを生かした実験をしている。メスシリンダーの代わりに注射器を使ったり、二酸化炭素をコーラから取り出したり、色々な工夫をしている様子を紹介する。また、現地の理科教師に実験の方法を教えたり、教材と一緒に作ったりしている活動を紹介する。

この実践で子どもたちに感じてほしかったのは、知識のある人の大切さと、ものがあってもそれも生かせる人がいないと役に立たないということ、そして、支援物資は使う人の気持ちになって考えてほしいことである。

子どもたちの感想

・支援とはうまくできるように力をかして助けるということを学んだ。私が調べた国以外にも知らない国がたくさんあることに驚いた。

・世界には学校に行けない人がいっぱいいたのが驚きました。100人村で50人が栄養失調に苦しんでいるということ学んだ。

・今回は国についてたくさん学んで、それを人につたえることができたのでよかったと思う。ほかの人の発表を聞いているとこの国はこんな所なんだとか、すごいなという所がいくつかあっておもしろかった。

・字が読めないというんなことがあるんだとわかった。文字が読めない人が世界の半分以上いるということがおどろいた。

・外国のおもしろいとこや、日本とちがうところなどがたくさんあって楽しかったです。

・初めて知ったことは、字が読めない人が半分以上もいるということです。おどろいたことは支援がものだけではないことです。くらしの豊かな国だけでなく、字が読めなかったり、栄養が不足している人がいるような、貧しい国についても理解を深めることができたので良かったです。

9~12時間目:調べたこと・考えたことをくすのき祭で発表しよう

13時間目:くすのき祭の振り返りと今後の課題

興味をもった国について調べたことの発表のほかに、「世界がもし100人の村だったら」「文字が読めないことはどういうことか」「世界遺産について」「支援とは何か」について発表する、4つのグループに分かれて活動した。今までならったことを、どういふうにみんなに伝えようかとクイズ形式にしたり、物語を読んだりと色々工夫し活動していた。(発表の様子)



成果と課題

研修に行き、私がとても驚いたのはカンボジア復興のため、様々な団体や組織が援助をしていることである。スポーツの振興をしたり、理数科分野の人材育成をしたり、地雷・不発弾の撤去作業をしたりと、多くの人たちが実際に活動している現場はとても深く心に残った。特に、現地の人たちと対等にコミュニケーションをとり、どうしたらいいのか一緒になって考える相互理解の姿勢や正しい知識を伝えていくことが本当の意味での支援の在り方だと感じた。そこで、カンボジアの現状だけでなく、現地で活動している人たちすべてを紹介したかったが、今回子どもたちに考えさせた課題として、「支援」に絞り、それを丁寧に伝えていこうと考えた。

本校では、国際理解委員会での取り組みとしてユニセフ募金をしている。子どもに、「なぜ募金をするの。」と聞いたところ「病気や困っている人がいるから」と答えていた。お金も大事な支援の一つだが、それだけではなく、今自分が使っているものを大切にすることや、困っている国について知り、援助について一緒に考えていく姿勢、正しい知識をつけることの大切さなど今の自分にできることも考えられればと思い授業を実践した。

「世界がもし100人の村だったら」を読んだときは、本当にそうなのと半信半疑だった子どもたち。「栄養失調ってなんだろう。」「文字が読めないはどうなるんだろう。」となかなか想像がふくらませない子どもたち。ロールプレイングや実際のカンボジアの体験を話すことで、「本当にそうなんだ...。」と自分の身近にもってこられたことは大きな成果であった。

また、支援ではJOVIC小松さんの活動に興味を持って聞いていた。現地にあるものや身近にあるものを工夫して教材にしていることや、支援としておくられてきた使うことのできない電子ピアノや山積みになったパソコンを見て驚いていた。創意工夫する力や他国(相手)をよく知ることが大事なことを少しでも理解し、今後の成長につなげてほしい。発表では学んだことを私が教えたよりも分かりやすく「くすのき祭」で発表しており、多くの人に知ってほしいという思いを感じることができた。課題としては、現地で活動している人をゲストティーチャーとして招きたかったという思いがある。来年は小松さんが日本に戻るといっているのでぜひ連絡をとり、交流ができればと思っている。また、子どもの世界の国々についての理解には積み重ねが大事だと深く感じた。国際理解という授業をやるからには、普段から社会や国語で国の名前が出たら、「どんな国か知っている？」など少しでもなげかけたり、ニュースの話題を取り上げ、他国への興味・関心を高めたり、理解を少しでも深めていくことが国際理解につながっていくのだと学んだ。

参考資料

文献

- 「世界がもし100人の村だったら」 池田 香代子 C.ダグラス・ラミス
「新・ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」 開発教育協会

ビデオ・DVD

- 日本ユニセフ協会「ユニセフと地球の友だち」(<http://www.unicef.or.jp/index.html>)
世界の国旗 たのしい授業 世界の国旗：授業者 斉藤裕子 スタジオ・オズ